

♪♪♪ いい歌、いい町、いい自然 ♪♪♪

No. 474

2002. JUL

広報

あかいけ

7

知らないうちに
足元を踏みつけてはいませんか？

友情

思ひやり

愛

やさしさ

人権

7月は同和問題啓発強調月間です

特集 同和問題

「部落差別だけが差別じゃない。社会には、障害者差別、人種差別、女性差別などさまざまな差別がある。なぜ部落差別だけ特別あつかいするのか」そう感じている人は少なくないようです。

「結婚差別や就職差別を受けてきたのは部落の人だけではない」という意見を耳にします。しかし、その結婚差別を受けた人が、就職や居住や教育の差別も受けてきたのかということ決してそうではないはずで

「部落差別の場合、同じ人が基本的人権に関わるすべての分野で差別を受けてきた経緯があります。しかも、個人ではなく、その地域のすべての人たちが何世代にもわたりその対象とされてきました。

部落差別は、構造的・意図的・政治的に存在してきた差別であり、地域的・世代的に封建時代から今日まで続いています。あらゆる差別の最も根の深いところにある部落差別をなくさなければ、すべての差別をなくすことはできないのです。

なぜ部落差別が特に重要な問題なのでしょう

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

なぜ「寝た子を起こすな」と考えるのですか

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

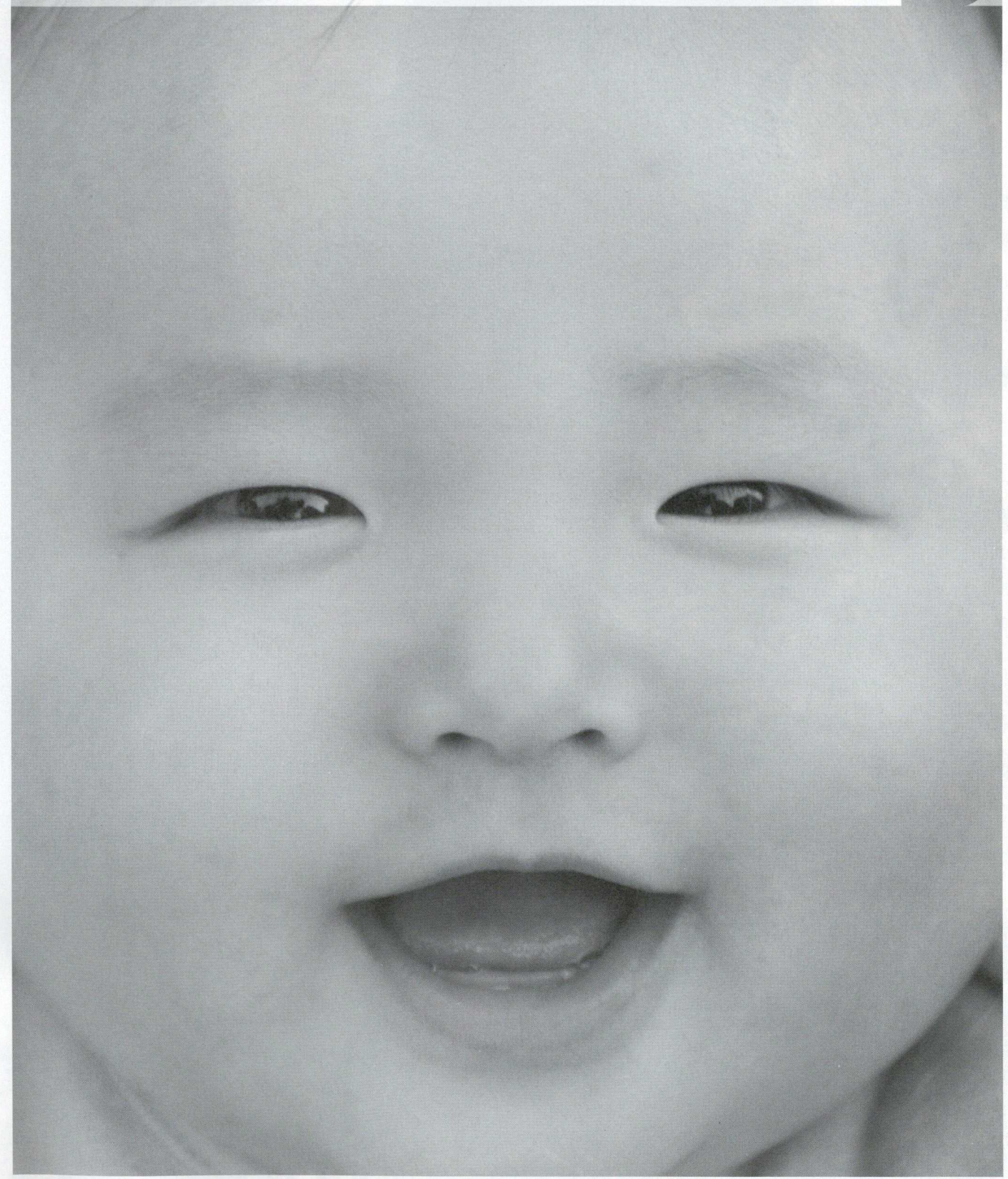
「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。

「寝た子を起こすようなことはい方が悪い。そっとしておけば差別は自然となくなる。何も知らない子どもによけいな事は教えない方がいい」という「寝た子を起こすな論」があります。世の中に全く偏見がなければ、その考え方は正しいかもしれませんが、しかし現実の社会には、さまざまな偏見が存在しています。



気づいたときが始まりです



大切になってきます。「起こす」ことは「育てる」こと。正しい歴史と現状認識を深め、これらの社会をどうすればよいのか、ど

んな人間になればよいのかなどの展望を持つことが必要です。そして、常に正しいことを学習する姿勢を持つことが大切なのではないでしょうか。

同和問題があるのはなぜですか

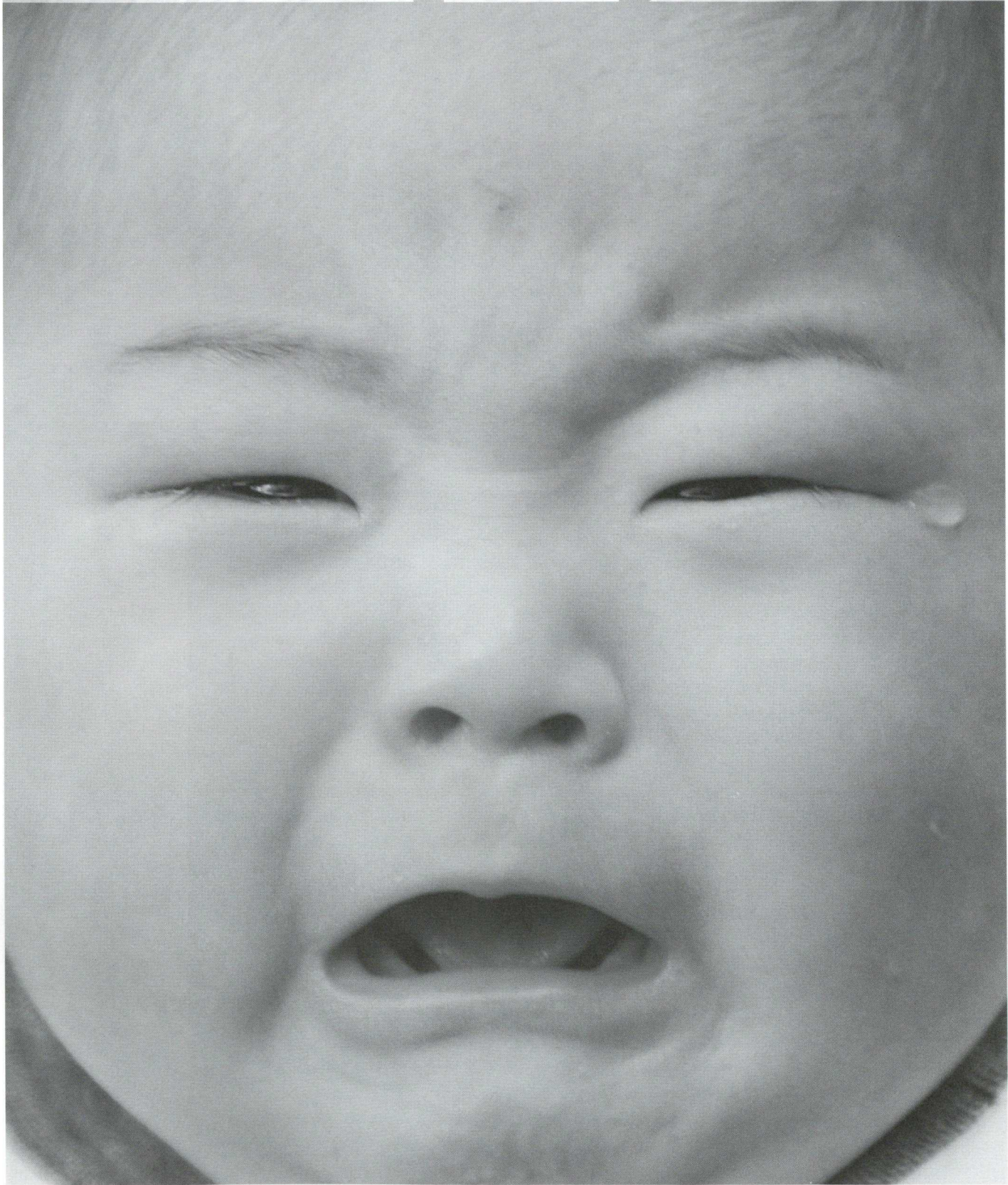
日本固有の人権問題である同和問題は、同和地区・被差別部落などと呼ばれる特定の地域出身であることや、そこに住んでいることを理由に様々な社会的不利益を受け、人間の誇りを傷つけられる問題です。部落差別・同和問題の起源は諸説ありますが、歴史的背景として江戸時代に確立された身分制度があげられます。近世初期の幕藩体制により、支配的身分である武士を頂点に、農・工・商の身分制度で維持する封建社会体制がつけられました。そして、さらに下層の身分として「えた・非人」などと呼ばれる賤民身分が置かれたのです。賤民身分の人々は、社会生活のあらゆる面で差別的な扱いを受けました。職業としては、牛馬処理・皮革製造・下級刑吏・警護など伝統的に蔑視されていた職業に固定されました。林野や用水の利用もほとんど許可されず、婚姻、交際、服装や髪型まで制限されていました。住居も多くの場合定められた土地に住むことを強制されました。このように差別を受けた人々が住まわされた土地の多くが、現在、被差別部落あるいは同和地区と呼ばれています。

同和問題は、1871(M4)年の「解放令」により身分制度そのものがなくなっているにもかかわらず、いまだに基本的人権が侵害されるという重要な問題です。この問題を解決するため、1960(S35)年に「同和対策審議会」が設置され、1965(S40)年に、その後の対策の基本的方向を示す答申が出されました。これを踏まえて、1969(S44)年から特別立法による同和対策(地域改善対策)事業が行われました。対策事業の内容は、生活・住環境整備、産業・就労対策、差別意識解消のための教育・啓発などです。その結果、住環境整備などは大きく改善されてきましたが、一方で、身元調査や結婚・就職差別などの心理的差別は、依然として解消されていません。2000(H12)年には「人権啓発及び人権啓発の推進に関する法律」ができ、国と地方公共団体の人権教育・啓発の責務と国民の人権尊重の責務が定められました。赤池町では2001(H13)年に「赤池町同和教育・同和問題啓発推進中長期計画」を策定し、同和問題啓発推進協議会を中心に同和問題をはじめとするあらゆる差別の解消に向けて活動しています。

無知が偏見を生み偏見が差別を生む

偏見

prejudice



子や孫たちに正しい価値観を教えることができますか？
うわさや先入観、うわべだけで決めつけてしまう危険性、
心の落とし穴にハマらないために意識の改革が必要です。

あなたは地域的偏見を 感じたことがありますか

「筑豊の人はガラが悪い」とか「筑豊ナンバーの車は怖い」という話を人伝えに聞くことがあります。しかしそういう人に限って「筑豊にきたことがない」「筑豊の人をよく知らない」という人が多いのではないのでしょうか。

例えば「筑豊の人はガラが悪い」という話を聞いていて、たまたま新聞で筑豊地区での暴力団発砲事件の記事を見たとき「やはり筑豊はそういう所なのか」と、間違った先入観によって新たな偏見を生みだすことにつながってしまうのです。その筑豊地域の中でも「田川地区が悪い」とか、その田川地区内でも「〇〇町が悪い」などと、理解できない話も耳にすることがあります。実に悲しいことです。

気は荒いが人情に厚い「川筋氣質」。その気の荒さだけが誇張され、広がってしまったように感じます。確かに筑豊地区で犯罪を犯す人はいます。しかし、ほんの一部の人や事件をみて、あたかも筑豊全体が、ま

た、そこに住むすべての人々がそうであるかのような視点で見られるのは、明らかに地域的偏見ではないのでしょうか。

偏見を持たないために 人権の意識を高めましょう

自分で確認したわけでもないのに、人から聞いた話を信じ込んでしまう。そして、ほかの人にあたかも事実のように話を広めてしまう。それが偏見の恐いところだ。

偏見を植え付けられた人が、社会において指導的地位に就いたり、人権を侵すような立場に立った時に、また、結婚についても子や孫にまで間違った結婚観を植え付けていくことが考えられます。

偏見を持たないためには、人の噂だけで信じ込むのではなく、自分の目で確かめる心がけが必要です。そして、事実を確かめたなら、その眞実はどこにあるのかを理解し、自己の意識改革を行い、人権意識を高めることが求められます。

偏見はこうして生まれる

私 はある日、山の向こうの町まで買物に行っていた…。途中でAさんに会った。Aさんが「どこに行っているんですか」と言うので「あの山の向こうの町まで買物に行っている」と答えた。そしたらAさんが「それは行かない方がいい、あの山には『狼』がいますよ」と言う。私はそんなことはあるまいと思いつつ更に進んでいた。そしたら、今度はBさんに会った。Bさんが「どこに行っているんですか」と聞くので「山の向こうの町まで買物に行っている」と言うと、Aさんと同じように「それは行かない方がいい、あの山には『狼』がいますよ」と言う。さっきも聞いたけど、そんなことはあるまいと思って更に進んでいたら、今度はCさんに会った。そしたらCさんがまた同じことを聞くので、私もまた同じように答えたら、Cさんがまた同じように「それは行かん方がいい、あの山には『狼』がいますよ」と言う。私は、A、B、Cという3人の人から「狼がいるから行かない方がいい」と聞いたけど、半信半疑で山の麓まで行った。いざ、その山に足を踏み入れようとした時に「火のない所に煙は立たない」ということわざを思い出して立ち

止まった。「火のない所に煙は立たない」ということは根拠のないことを人は言わないという意味である。ひょっとしたら「狼」があるんじゃないだろうか、いや、おるに違いない。そう思った私は行くのをやめて引き返した。そしたら途中でDさんに会った。今度は私の方から、「Dさんどこに行ってるんですか」と聞いた。Dさんは「山の向こうの町まで買物に行っている」と言う。そこで私はDさんに言った。「それは行かない方がいい、あの山には『狼』がいますよ」。私は、A・B・Cという3人の人から「狼」がいるから行かない方がいいと聞いたに過ぎない。何も「狼」がいるかいないかを確かめたわけではない。それなのにDさんに話をする時は、あたかも見てきたかの如く「狼」がいるから行かない方がいいと言っている。こんなことは、我々の日常生活の中ではよくあることである。偏見とはこんなことではないだろうか。いろんな人から、いろんな所で、いろんなことを聞かされる。そしていつの間にか信じ込んでしまう。(大谷清人氏著書「同和教育の中で考えたこと」より抜粋)